

## 理性と信仰についての一考察

—バルトとブルンナーの神学論争をめぐって—

船 本 弘 毅

### I. はじめに

いわゆる理性と信仰の問題は、キリスト教神学における主要な課題のひとつである。神の啓示を人間がいかにかに受けとめ、またそれを知りうるのかという、啓示の認識の問題については神学史上さまざまな論議がなされてきた。

本論は、この問題をバルトとブルンナーの有名ないわゆる自然神学論争——イマゴ・デイをめぐって——を中心に探究し、一つの光をあてようとするものである。それはこの論争が、神学は哲学を許容するのか、否定するのかという神学方法論上の論争であると思われるからである。

### II. 論争の背景

十九世紀末から二十世紀初頭にかけては、周知のごとく、いわゆる自由主義神学が神学の世界を風靡した。自由主義神学、あるいは近代主義神学と呼ばれるこの立場は、人間の理性とか体験に強調点を置き、当時論争された進化論仮説をも含めて科学を進んで受け入れ、聖書研究には歴史的批判的方法を取り入れ、また当時力をもっていた理想主義哲学を信仰を弁護する道具として用いたのであった。そして神学は宗教哲学の一分科であり、キリスト教という特定の宗教の研究をするものと理解された。

しかし第一次世界大戦後、ドイツやスイスを中心に、このような自由主義神学の動きに反対し、神と人間との関係をキリストにおける独自の啓示によって理解しようとする新しい神学運動が起ったのであった。そのきっかけになったのは1919年に出されたカール・バルトの『ローマ書講解』である。この新しい神学運動を支え推進した神学者

として有名なのは、カール・バルト、エドワルト・トゥルナイゼン、エミール・ブルンナー、フリードリッヒ・ゴーガルテン、ルドルフ・ブルトマン、パウル・ティリッヒ、ラインホルド・ニーバーなどであり、通常この運動を弁証法神学、あるいは危機神学と呼んでいるのである。

弁証法神学と呼ばれるのは、神学的表現にケルケゴール流の弁証法を用いたためである。すなわち人間が不完全なことばで神について語るには限界があり、あることを言いあらわすためには一つの叙述ではなく、それを異なる面からも表現しなければならないとしたのである。たとえば人間が神の像ににせて創造されたことを語る時には、同時にその人間が罪によって墮落した存在であることを語らねばならないし、創造者なる神はまた隠された神として語られねばならないと主張したのである。

そして彼らは、神が人間と直面する時危機が生じると主張して、人間中心的な近代主義的キリスト教に反対したのであった。

この弁証法神学のグループは『時の間に』(Zwischen den Zeiten)と題する研究誌を発行して盛んな神学運動を行なったが、やがて彼らの間にある立場の相異が顕著になり、一つの言葉でその立場を総称することが困難となり、決裂を余儀なくさせられたのであった。

その対立の典型的な例を、われわれはバルトとブルンナーの間に戦かわされた論争の中に見ることが出来るであろう。

### III. E・ブルンナーの立場

エミール・ブルンナー (Emil Brunner) は1889年12月23日スイスのチューリッヒの東北ヴァインタ

ートゥールに生れた。しかし青少年時代を生活し、教育を受けたのはチューリッヒ市においてであった。1916年から3年間オプスタルデンで牧会に従事したのち、1920年にはニューヨークのユニオン神学に留学、帰国後チューリッヒ大学の神学部私講師となり、24年に組織神学・実践神学の教授に就任し、生涯をそこで過したのであった。したがって彼は生粋のスイス人であり、チューリッヒ人であった。

1938年には米国のプリンストンで教え53年から55年にかけて来日、国際キリスト教大学の教授として活躍、日本の教会と神学界に大きな影響と感化を与えたのであった。

ブルンナーの初期の著作で重要なものは、1924年に初版の刊行された『神秘主義と言』<sup>1)</sup>であるが本書でブルンナーはシュライエルマッハーの心理的経験主義的宗教理解の本質を神秘(Mystik)とみなし、そこに異教要素の混入をみて、これに対して聖書的また宗教改革的な神の言(Wort)の立場を主張することによって、近代主義神学・自由主義神学の主観主義、内在主義と決別し、弁証法神学の立場を明かにしたのであった。ブルンナーはやがて自己の立場を「出会い」(Begegnung)の概念を用いることによって方法論的に確立した。

1938年の『聖書の真理の性格——出会いとしての真理』<sup>2)</sup>は、彼の立場を明かにしたのものとして重要であり、さらにこれを発展し展開したのが『教義学』<sup>3)</sup>三巻である。

ブルンナー神学の独自性は、この「出会い」という人格主義的思想に導かれて、真理をドグマの中ではなく、神と人間との出会いという生きた現実の中でとらえようとしたところにある。したがって彼の立場は伝道の神学、宣教の神学として特色づけられる。そして彼自身、弁証学(Apologetik)より、積極的に福音の真理を主張するという意味で自己の方法を争論学(Eristik)<sup>4)</sup>と表現したのであった。

バルトが神学的実存(Theologische Existenz)という言葉を用いたのに対し、ブルンナーは宣教的実存(Verkündigende Existenz)を用いており、彼の実存は根本的には宣教的関心によって性格づけられていたと云えよう。1966年4月8日、

77才でこの世を去っている。

さて今、ここで問題にしようとするいわゆるバルトとブルンナーの論争は、1934年ブルンナーが著わした『自然と恩寵——カール・バルトとの対話のために』(Natur und Gnade. Zum Gespräch mit Karl Barth)と題する僅か44頁の小冊子によって口火が切られた。ブルンナーはそこでバルトの問題点を6つの命題にして揚げ、罪のゆえに失われた人間がなお神を求める道、バルトがローマ書で用いた表現によれば「神の怒りの足跡」<sup>5)</sup>にすぎないこの世界の中で、なお神の栄光を仰ぐことはできないかを問題にして、ブルンナーは結論として、「正しき自然神学への帰路を見出すことこそ、われわれの神学的時代の課題である」<sup>6)</sup>と主張したのであった。ブルンナーのこの主張は弁証法神学の陣営をゆり動かすところのものとなったのであるが、K・フェーツァー、O・ウェーバー、P・アルトハウスなどはブルンナーを支持し、「ドイツ牧師新聞」はこれを評して「一つの鉞脈、まさに金鉞の発見」と絶賛したのであった。<sup>7)</sup>

これに対しバルトは同年秋、『ナイン(否)——エミール・ブルンナーへの回答』(Nein! Antwort an Emil Brunner)を刊行、激しい反論を加えた。さらに翌年には、ブルンナーが『自然と恩寵』第二版を補正つきで出版してそれに答えたのであった。

バルトとブルンナーの論争とそれに続く訣別は、この時に始まったのであるが、両者の対立はさらに時代をさかのぼり、ブルンナーが『神秘主義と言』(1924年)、『神学のもう一つの課題』<sup>8)</sup>(1929年)を公やけにした頃から始まっていたというのが正しいであろう。

ブルンナーは後者の論文において、神学の第一の課題は教義学(Dogmatik)であるが、第二の課題として弁証学(Apologetik)がある。しかもそれは単にもう一つの課題に留まるのみでなく、神の言が人間に向けて語られる真理であるとすれば、その神の言の神学は必然的に宣教の神学とならざるを得ないのであり、弁証学——ブルンナーは先述せるごとく、これを独自の争論学ということばで言いあらわしているのであるが——に自己の神学の課題を見出すと主張したのであった。

かかる立場に自己の使命を見出したブルンナーにとっては、キリスト教信仰と教会の使信に対立するその時代の教えやイデオロギーとの思想的対決が当然重要な関心事となり、これがやがて神の福音の人間における結合点(Anknüpfungspunkt)を問題にすることになったのである。したがって1932年の『神学の問題としての結合点の問題』<sup>9)</sup>は、問題の書『自然と恩寵』の前提をなすものとして位置づけることができるのである。

さて、ブルンナーは次のように自らの見解を明かにする。「けれども、まさしく信仰において、イエス・キリストの啓示に基づいてわたしたちは二重の啓示について語らざるを得ないであろう。すなわち、第一はキリストによって眼が開かれた者のみがその様相全体を認識しうる創造における啓示、第二はイエス・キリストにおける啓示で、その完全な光の中に第一の啓示を明かに見せしめるのみではなく、第一のものをはるかに越えて、しかもなお第二のものとは全く区別されながらもそれを否定せず、むしろわれわれの思いを越えてこれを完成するところの顔と顔を合わせ見る第三の啓示をも指示するものである」<sup>10)</sup>(傍点筆者)と。

すなわちブルンナーは、イエス・キリストのみの中で二重の啓示が語られねばならないのであり、自然と恩寵を問題にせざるを得ないと主張するのである<sup>11)</sup>。そしてバルトが、創造はキリストにおいて初めて認識されるのであるとして、それを軽視したり、除去したりすることに反対するのである。ブルンナーによれば、むしろイエス・キリストの啓示のみが、われわれに創造が世の初めから決定的な事実であったということを認識させてくれるのであり、したがってわれわれは創造の啓示を軽視しないで、キリストの啓示と並ぶ二重の啓示として認識せねばならないということになるのである。罪人である人間と神との間には越えがたい断絶があるのであり、両者を結ぶ結合点は見出し得ない。しかし創造論点視点、すなわち創造の啓示から見るならば、この世界と人間は、その罪による墮落にも拘らず、なお神の保持の恩寵によって維持されているのであり、そこに「結合点」が存在すると言われねばならないと、ブルンナーは説くのである。

次にいわゆるイマゴ・デイ(神の像)の問題を取上げる。

ブルンナーは神を人格的に把握すると共に人間をも人格的に理解する。いうまでもなく造られた人間は神から汝と呼びかけられ、その神に主体的に応答する時、人格となるのである。人間は「神の像」として創造された(創世記1:27参照)ゆえに、神との自由な人格の交わりが許されていた。しかしその人間は罪を犯すことによって<原始的義>(iustitia originalis)を全く失ってしまったのである。

ここで、人間はその墮罪によって<神の像>を失ってしまったかどうか問題になってくるのである。ブルンナーはこの問題について、<神の像>の内容的・実質的(inhaltlich-material)規定としての<原始的義>は確かに全く失なわれてしまったが、形式的・構造的(formal-strukturell)な<神の像>は失なわれていないと考える。そして「しかし彼は人格性にみちた人格(personhafte Person)ではなく、反人格的な人格(widerpersönliche Person)である」<sup>12)</sup>と主張している。

ブルンナーが<神の像>を内容・実質と形式・構造に分けて考え、前者を否定しながら後者を肯定した考え方は、先に述べたキリストの啓示と創造の啓示という考えから理解しうるであろう。すなわち、神は創造者にして救済者、救済者にして創造者なのである。人間は墮罪においても、なお人間でありつづける。したがってブルンナーは、人間が神にそむき徹底的に罪に堕ちていることをはっきりと認めながら、なおそして歪められた形においてではあるが<神の像>が残存していることを容認しようとするのである。そしてブルンナーは1937年に著した『矛盾における人間』<sup>13)</sup>の中では、人間を創造—墮罪—救済の救済史的構成の中で捕え論じているのである。

#### Ⅳ. K・バルトの立場

バルトは1968年に82才の生涯を閉じたのであるが、あの膨大な『教会教義学』(Kirchliche Dogmatik)を始めとする数多くの著作によって現代神学界に指導的役割を演じて来たのであった。その死に際して、まだ30余年を残しながら多くの人々が「20世紀最大の神学者」という賛辞を

何のためらいもなく彼に帰したのもゆえなきことではない。

彼は1886年5月10日スイスのバーゼルに生れた。父フリッツ・バルトは牧師であったが、後に新約学の教授としてベルリン大学に移ったためそこで成長したが、彼は常にバーゼル人であるという自覚を失わなかった。バルトはベルリン、チュービンゲン、マールブルクに学び、当時の近代神学、自由神学に触れた、教師としてはハルナック、ゲンケル、シュラッター、ハルマンなどに触れ、また生涯の友となったエドゥアルト・トゥルナイゼンとの出会いや、信仰面で大きな影響を与えたクリストフ・ブルームハルトとの出会いなどは忘れるわけにいかない。

1909年ジュネーヴのドイツ語の改革派教会副牧師に就任、21年まで牧師として活躍すると共に社会運動にも積極的に参画した。1918年彼はローマ書講解の初版を千部限定で出版したが、これがドイツのルター派神学者ゲオルグ・メルツの目にとまり、1919年バルトはタムバッハの宗教社会主義者の集会に招かれ、有名なタムバッハ講演を行なった。かくして彼の名はドイツ神学界に急速に広まり、彼は近代主義神学の克服を目指して『ローマ書講解』第二版を世に問うた。これが、神学界に新しい時期を画し、弁証法神学の出発点となったといわれるバルトのローマ書である。

かくて1921年、バルトはゲッティンゲン大学の教授を皮切りに、ミュンスター、ボン、さらにヒットラーによりドイツを追われてからはバーゼルにおいて神学者としての道を歩み始めたのであった。

1922年にはゴーガルテン、トゥルナイゼンなどと共に『時の間に』という双書を発表し、自由主義神学と対決し、また数々の著作を相次いで発表し現代神学をリードしたのであるが、その中心になったものは1932年以来、死にいたるまで書き続けた『教会教義学』<sup>14)</sup>であった。1933年にはドイツのキリスト者や実存主義的神学者たちと「訣別」し、『今日の神学的実存』(Theologische Existenz Heute)という新しい神学双書を発刊、教会の抵抗運動の理論的支柱となりつつ、著作に励んだ<sup>15)</sup>。

彼の神学思想全体を貫く根本思想は、神の自由

と主権性であり、哲学的思惟とは異なる神学的思惟を強調したのであった。

このバルトに対しては多くの賞讃と共にまた批判や疑問のあることも当然であるが、その一つは彼が哲学にどのような態度をとるかということであり、一般的表現を用いるならば〈理性と信仰〉の問題であり、それが端的にあらわれているのが、ブルンナーとの論争であると云えよう。

従来、バルトは自然の生れつきのままの人間の中には、神の言を受容するための積極的な備えとなるような〈結合点〉は存在しないと主張する。したがって彼は〈神の像〉は人間の墮罪によって、形式的にも実質的にも全く失われたと主張していると考えられて来た。

しかしバルトがブルンナーの挑戦に応じて書いた有名な『ナイン(否)』において、バルト自身は次のように述べているのである。「人間の神と似た姿は罪によって完全に消失した。一般的啓示を主張するあらゆる試みは斥けられねばならない。創造の恩恵と維持の恩恵といったものは存在しない。われわれが認識しうる維持の秩序は存在しない。神の救済行為にとって結合点は存在しない。……こういう一連の主張をわたしはブルンナーが知り、また言っているような形で、決してまとまった形で述べてもいないし、また弁明もしていない。またそのような主張をたてたことは決してなく、将来においてもそうであろう。……かかる根本態度と立場とは、彼ブルンナーのそれであって、わたしのものではない」<sup>16)</sup>

この点は我国では菅田吉博士が注意を喚起したのであるが、従来誤解されて来た点として充分注意されねばならない。<sup>17)</sup>

さてそれではバルトは自然神学の問題や、神の像の問題について如何なる立場をとるのであろうか。彼は『否』の中では自然神学の可能性の問題を中心に論じており、イマゴ・デイについてはほとんど触れていないが、1938年に出版されたギッフオード講演『神の知識と神の奉仕』(The Knowledge of God and the Service of God)の中で、それを問題としている。

「神はまた言われた『われわれのかたちに、われわれにかたどって人を造り』……神は自分のかたちに人を創造された」(創世記1:26)

バルトはこの「かたち」(imago)は、ヘブル原典の持つ本来の意味からするならば、人間の性質とか人間の持っている何物かを指すのではなく、むしろ「反射」(reflection)<sup>18)</sup>と訳すべきであると言う。したがって人間が神の像に創造されたということは、形のことではなく、神の栄光を反射すべき者として神に向けて造られたことを意味し、神の栄光をあらわしつつ感謝して生きるのが人間の姿であると主張するのである。

さらに彼は『教会教義学』の中で主張を展開させて、次のように述べている。

「人間は自分自身において自由であるのではない。人間はこの自由を言わば真空の空間の中におけるが如くに自分の性質や活動や素質や本質として持っているのではなく、人間に向って自由であらんと欲し、また常にくり返し自由であらんと欲するところの創造者なる神に向っての自由なのである。神がかかるとして人間を自由な者として創造し、また自由であらしめるということが、〈神の像〉に神が人間を造ったということの意味である。その点で人間は他の被造物から区別される。……神に似た人間の姿は全く神から与えられ、また神によって指定されるところの関係として啓示される。神が人間に向ってあるように、また人間も他の人間に向って存在する。ただし人間が他の人間に向って存在するのは、神が人間に向ってある限りにおいてのことである。したがって神に似た人間の姿という言葉の意味は *analogia relationis* (関係の類比)、すなわち関係が似ているということであって、*analogia entis* (実在の類比)と考えられてはならない」<sup>19)</sup>

このようなバルトの論述から明かなことは人間が墮罪と共に神の像を形式的にも内容的にも失ったということは、旧約聖書からは出て来ないということである。〈神の像〉は人間の所有物ではないのであるから、それを失ったりすることはあり得ないのである。宗教改革者たちは〈神の像〉を人間の所有する〈完全な状態〉と理解したので、イマゴ・デイは墮罪によって失なわれてしまったと主張したのであるが、バルトによればそれは聖書の語るところではないのである。〈神の像〉が神と人間との関係を意味するものであれば、墮罪によってとぎれるのではなく、むしろ逆にその時

にその関係は真実に問題となって来るのである。人間の犯した罪にも拘らず神の意志と約束とは決して失なわれることはない。ただ罪を犯した人間は、神の前には審かれるべき存在であって、自分の能力によって神と結びついたり、その関係を回復したり、あるいはまた残されている神の像を自分の力によって認識することはできないのである。それはただ神の働きによってのみ始めて可能であると言うのがバルトの立場である。墮罪の人間に神はそのただ中で汝と呼びかけ、人間に責任をとらしめ、その関係を回復せしめたもう。そしてそれはただ神の決意と行動によってなされる神の行為であって、人間はただくり返し希望するのである。したがってバルトは「神と人間の結合点は信仰の外ではなくして、信仰の中でのみ現実となる。信仰の中で人間は、神の言を通して始めて神の言を聞くように造られる」<sup>20)</sup>と主張するのである。

## V. 理性と信仰について

以上の論述から明かなように、いわゆる〈イマゴ・デイ〉論争において、バルトとブルナーはかつて一般的に考えられたようにその立場を全く異にしているのではなく、むしろ互に歩みよりを見せていることを、われわれは認めねばならない。しかし彼らの神学的立場はその根本において尚対立していることはやはり否定できないであろう。

ブルナーにおいては聖書の啓示は人間の持っているイマゴの残りを訂正し補充して完全なものにすることにあるが、バルトにおいては人間が自己の能力によってイマゴを回復することは決して出来ず、それはただ神の決意と働きによるのである。バルトは啓示を自律的人間の自己理解の円周を外から破る力として理解している<sup>21)</sup>。ブルナーが常に人間に目を向けるのに対し、バルトは常に神に目を向け、神から始めると言うことができよう。しかしそのことは、バルトが人間の理性を否定したり、文化を無視するというのではない。ただ彼は常に理性自身が主になることを警戒し、理性の向うべき目標を問題にするのである。

したがってバルトはブルナーのごとくに神の啓示が人間に届くために、人間の中に何らかの結

合点が必要であるとは考えない。彼によれば神は自由に欲するままに人間と交わりを持ち得るのである。理性から啓示に達する道はなく、啓示から理性への結合があるのみである。そして啓示が理性と結合した時、そこで始めて理性は創造の際の本来の自己の姿を想起するのである<sup>22)</sup>。

先に述べた如く、ブルンナーは神学の課題を争論学 (Eristik) として表現したのであるが、これは論争 (erisein) という語に由来する言葉であり、生ける神を信じる信仰が現実を生起するならば、そこにはこの世的思想や生活に対する挑戦が行なわれるのであるから、必然的に争論学的事態がひきおこされると見ていたのである<sup>23)</sup>。ブルンナーによれば、神学の課題は福音の宣教の純粋さを保つために必要な人間の反省的批判的思索をなすということにあるのであり、宣教の言葉を概念化する必要が当然生じてくることになる。彼の関心に従えば神学は伝道の神学、宣教の神学でなければならず、したがって神学は本来理性とは矛盾する福音の真理を、しかも理性によって明かにするという課題を担うことになるのである。

それに対しバルトの立場は、神学は何よりも教会を基礎づけるところの神の言そのものに関しての批判的反省である。それは教会の信仰が真の信仰であるかどうかを検証することであり、その規準が神の言なのである。したがって神学は彼の場合、理性の反省ではなく、信仰の反省である。すなわちバルトにとって神学とは「信仰が本当に正しく信仰として働いているかどうかの反省、あるいはいわまた教会が果たして正しく神の言を宣べ伝えているかどうかについての教会自身の反省であり、その意味において、またその限りにおいて悔改めと服従という信仰の行為にほかならない」<sup>24)</sup> というのが正しいであろう。

ブルンナーが神学を信仰と理性との矛盾とか戦いとか限界とかを明かにする理性の活動であると見なしているのに対し、バルトは神学することは信仰それ自身の活動にほかならないと理解するのであり、そこに両者の神学的立場の相違があることを見落してはならない。

バルトとブルンナーの論争はバルトの勝利に終わったように見える。それはブルンナーの論理には混乱が見られたのに対し、神から人間を理解しよ

うとするバルトの立場は終始一貫していたからであると考えられる。しかも不幸なことにこの論争は特にバルトの側に徹底的に論じ合って討論するというよりは、対決の姿勢が強く、ナインと云う断定で打ち切られてしまった感が強い。しかしブルンナーがいわゆる結合点や神の像の論議において問題にしようとした事柄は無視し得ないし、またそれを一面的に斥けてしまうことは正しくないであろう。

最後にバルトにおける神学と哲学の関係を取りあげる。従来バルトは哲学に対して警戒的であるとされて来た。しかし彼は第ハインリッヒ・バルトへの献呈論文『哲学と神学』においては、神学と哲学はそのことばや方法においては異なりつつも、互に協力し合い助けあって一つの全体的真理に進んで行く道があることを認めている。一つの真理に直面して、神学と哲学は互にその対立、相違を徹底させたのち、両者の対面における共存関係が可能になる。すなわち、両者は安易に妥協するのではなく、むしろ両者は相互の個有の場に留まることによって、反って他にとって刺戟的でありうるのであり、互いに他の問題に誠実な参考と真剣な承認をささげることが許され、そして互に助け合うことが出来るのであると述べている<sup>25)</sup>。

自由主義神学が宗教哲学をもって神学にとって代るものと理解し、神学を特定の宗教すなわちキリスト教を研究する宗教哲学の一分科とみなそうとしたことに対し、バルトは激しく抵抗し、哲学が自己の限界をこえて隠密神学になる危険を鋭く警告した。彼の生涯の関心は哲学的思惟ではなく、神学的思惟であった。しかし彼は人間の理性を否定せず十分に重んじ、哲学が人間の思惟の論理学に留まる限り、それはよき哲学であり、それに対し彼は「聖なる畏敬」<sup>26)</sup> を持つと述べているのである。

## 注

- 1) E. Brunner : Die Mystik und das Wort. Der Gegensatz zwischen moderner Religionsauffassung und christlichem Glauben, dargestellt an der Theologie Schleiermachers. 1924.
  - 2) Wahrheit als Begegnung. Sechs Vorlesungen über das christliche Wahrheitsverständnis. 1938.
  - 3) Dogmatik Bd. I. Die christliche Lehre von Gott. 1946, Bd. II. Die christliche Lehre von Schöpfung und Erlösung. 1950, Bd. III. Die christliche Lehre von der Kirche, vom Glauben und von der Vollendung. 1960.
  - 4) 大木英夫著「ブルンナー」P. 98 参照
  - 5) K. Barth : Römerbrief. S. 19.
  - 6) E. Brunner : Natur und Gnade. S. 44.
  - 7) 近藤定次著「バルト神学における神と人間」P. 5
  - 8) Die andere Aufgabe der Theologie. Zwischen den Zeiten 7, 1929, Heft 3.
  - 9) Die Frage nach dem "Anknüpfungspunkt" als Problem der Theologie. Zwischen den Zeiten. 10, 1932, Heft 6.
  - 10) E. Brunner : Natur und Gnade S. 14. (以下 N. u G. と略す)
  - 11) 大木英夫著. 前掲書 P. 118 -119参照.
  - 12) N. u G. S. 11.
  - 13) E. Brunner : Der Mensch im Widerspruch. Die christliche Lehre vom wahren und vom wirklichen Menschen 1937.
  - 14) バルトの『教会教義学』は13冊が刊行された。第一部 神の言の論, 第二部 神論, 第三部 創造論 第四部 和解論となっており, 未完に終わった第五部は救済論となる予定であった。既刊の発行年代は次の通りである。I / 1 1932, I / 2 1938, II / 1 1940, II / 2 1942, III / 1 1945, III / 2 1948, III / 3 1950, III / 4 1951, IV / 1 1953, IV / 2 1955, IV / 3—1 1959, IV / 3—2 1959, IV / 4 1967, Register 1970.
  - 15) バルトの生涯についてはファングマイアー著(加藤・蘇共訳)『神学者カール・バルト』(Der Theologe Karl Barth)が小さいものであるが優れている
  - 16) K. Barth : Nein ! Antwort an Emil Brunner S. 11.
  - 17) 菅田吉「バルトとブルンネルのイマゴ・デイ論争の行方」『キリスト教学』第7号。尚, バルトの立場については本論文に多くを負っている。
  - 18) K. Barth : The Knowledge of God and the Service of God P. 38.  
菅田吉 前出論文 P. 4.
  - 19) K. Barth : Kirchliche Dogmatik III / 1 S. 214—233. 菅田吉 上掲論文 P. 5参照.
  - 20) K. Barth : Kirchliche Dogmatik I / 1 S. 251.
  - 21) 吉永正義著「バルト神学とその特質」P. 257.
  - 22) 菅田吉「理性と啓示」P. 177—178. 参照
  - 23) 大木英夫「前掲書」P. 98—99 参照
  - 24) 菅田吉「前掲書」P. 182.
  - 25) 山本和「哲学と神学」『福音と世界』1966年5月 P. 29 参照.
  - 26) ゴッドシー編(古屋訳)『バルトとの対話』P. 46.
- 付記 本論は1971年の関西学院大学総合コース「理性と信仰」においてなされた講義に手を加えたものである。